

# 文学に詠まれたる「薔薇」について

—「我はけさうひにぞみつる」考ほか—

龜山寧

## 一、「我はけさうひにぞみつる」考

古今和歌集の撰者の一人である紀貫之は、集中の所載歌百二首、古今歌人の中では最も多くの歌をのこしている。その中の一首、

我はけさうひにぞみつる花の色を

あだなる物といふべかりけり

(古今集、卷十、物名 紀貫之)

について一考してみたい。

物名は、与えられた題のことば(多くは何かの名である)を、かけことば式に詠みこむものといわれる。古今和歌集卷十物名は全部で四十七首あり、鳥、植物、地名その他が詠みこまれていて、その中でも植物が多く、うめ、かにはざくら、すももの花、からもの花、たちばな、をがたまの木、やまがきの木、あふひ、かつら、くたに、とあって、次にこの「我はけさ……」の歌が「さうび」と題して続いている。後は、をみなへし、きちかうの花、しをに、りうたんのはな、をばな、けにごし、めど、しのぶぐさ……と続いている。これ等一連の植物を見てみると、当時庭園に植えられ、鑑賞されていたものと考えられる。

さて、この「さうび」は、貫之をして、「うひにぞみつる花の色」

と詠ましめているが、それは何を意味するのか。

万葉集には「さうび」なることはあらわれていない。それに相当すると思われることばは、「棘原」(うばら)、「宇萬良」(うまら)であって、集中に各々一度ずつ用例がある。

3832

枳 棘原剝除

枳からちの

棘原刈り除け

倉將立 屎遠麻礼

倉立くらたてむ 屎遠くそとくまれ

櫛造刀自

櫛造くしぞうる刀自とほじ

(口訳) 枳のいばらを刈払って倉を立てようと思う。だからそのへんをよごさないように、尿は遠くにしなさい。櫛を造るおかみさん。

4352

美知乃倍乃

宇万良能宇禮尔

波保麻米乃

可良麻流伎美乎

波可禮加由加牟

道の辺うへの

道ほ豆まめの からまる君を

はがれか行かむ

(口訳) 道のほとりの茨の枝先に這ふ豆のように、私にからみまはるあなたに対して引き離されて別れて行くことであろうか。

(万葉集注釈 卷第廿 澤瀉久孝)

前者の「枳棘原」の枳は「加良立花」と新撰字鏡にあるように唐橋の略で、「棘原」はいばら、「宇万良」と同じである。しかし、この場合は、直前に「枳」と説明があるので、「とげのある小低木」の意とみられ、いわゆる「いばら」をさしているのではない。

その点「宇万良」は、語の上にとりたてての説明は冠してないの、道の辺の茨と素直に受けとつてもよさそうである。

いずれにしても、「茨」を鑑賞用として取扱つていないのは確かであり、棘のある邪魔な存在と見られている。万葉時代にも、ばらは花開いていたであろうが、人々の注意を喚起するまでには至らなかった。

ところで、貫之の「さうび」とはどのようなばらをさしていたのであるうか。原色薔薇洋蘭図鑑によると、在来の日本原産のばらは「ノイバラ」「テリハノイバラ」「サンショウバラ」「ナニワイバラ」「ハマナス」としている。後世、中国から伝来して各種のばらが栽培されていったとみられるが、どうも「さうび」はこれら中国伝来のばらをさしているらしい。

というのは、「さうび」は「棘原」「宇万良」と異って舶来語であり、中国の「薔薇」の音である。したがって、貫之の「うひにぞみつる」ということばには、新しいものを先取りしていく心意気が見られるのである。

「薔薇」なる語がいつから日本に渡来したかは明確にできないが、恐らく漢詩の中に詠みこまれていることばとして、珍重され始めたのであろう。

中国においては、現在ばらをさす語としては「玫瑰」を使つてい

るようで、昨秋、敦煌の文物研究所長の常書鴻氏が御一家で来目され、井上靖氏、陳舜臣氏等と奈良を訪れた時、拙作のばらをさしあげたところ、その謝礼の手紙には、ばらのことを「玫瑰」と書いておられる。私事にわたつて恐縮であるが、この原稿を書いている翌早朝（昭和五十五年三月二十四日）には中国に立出することになっていたので、現地で「薔薇」なる語は、今の中国ではどう用いられているのか、「玫瑰」と関連して調べてみたいと思つてゐる。

もともと「玫瑰」は中国原産のばらの一種であり、本来は紅色の美しい玉をさす語であり、花自体はハマナスの中国名である。その果実が紫紅色の宝石に似ているところから、「玫瑰」と呼ばれたのである。しかし常書鴻氏にさし上げたばらはハマナスではなかったので、今使われている「玫瑰」はもつと広い範囲で用いられていることは明白である。

さて、もとかえつて「薔薇」なる語は、中国のいつの時代から詩文にあらわれるのであろうか。京都大学の都留春雄氏は、「高駝の七絶「山亭夏日」について」（角川書店国語科通信No.17）の中で「詩経」「楚辭」「文選」には使用例がないと断言されており、始めて詩語として「薔薇」が用いられているのは、唐初の「芸文類聚」に所収されている南齊の謝朓（四六四—四九九）の詩ではないかと言われている。

#### 薔薇を詠ず

齊 謝朓

低枝詎勝葉 低れし枝は詎んぞ葉に勝えんや

輕香幸自通 輕かなる香りは目のずから通せんことを幸う

發芽初積紫 發きし芽は初めて紫を積み

余采尚霏紅 余れる采は尚お紅を霏わせり

新花对白日 新花は白日に対し

故葉逐行風 故き葉は行く風を逐う

參差俱曜 參差として曜きを俱にせざれば

誰肯盼微叢 誰か肯て微き叢を盼みんや

賦し得て薔薇を詠す

梁 簡文帝

(在位 五四九—五五二)

石榴珊瑚葉 石榴 珊瑚の葉も

木樞懸星葩 木樞の星を懸けたる葩も

豈如茲草麗 豈に茲の草の麗かなるに如かんや

逢春始發花 春に逢うて始めて花を發く

迴風舒紫萼 迴る風に紫の萼を舒べ

照日吐新芽 照らす日に新しき芽を吐く

(このあと詩句が欠けているのではないかと思われます。)

薔薇を摘するを見る

梁 元帝

(在位 五五二—五五四)

倡女卷春閨 倡い女の春閨に卷み

迎風戲玉除 風を迎えて玉の除に戯る

近叢看影密 叢に近くして影の密なるを看

隔樹望釵疎 樹を隔てて釵の疎なるを望む

横枝斜縮袖 横枝は斜めに袖を縮き

嫩葉下牽裾 嫩き葉は下く裾を牽く

牆高攀不及 牆高くして攀ずれども及はず

花新摘未舒 花新しくして未だ舒びざるを摘む

莫疑挿鬢少 鬢に挿すに少なきを疑う莫かれ

分人猶有余 人に分かちて猶お余り有り

薔薇を詠す

梁 鮑泉

(生没年不詳)

經植宜春館 経つて植う宜春館

蘿靡上蘭宮 蘿靡たり(草や花が美しくなびくさま) 上蘭宮

片舒猶帶紫 片は舒びて猶お紫を帯び

半卷未全紅 半ば巻きて未だ全くは紅ならず

葉疎難蔽日 葉は疎らにして日を蔽うこと難く

花密易傷風 花は密にして風に傷み易し

佳麗新粧泚 佳麗新たに粧い罷り

含笑折芳叢 笑を含んで芳叢を折る

東山を憶う

盛唐 李白

(七〇一—七六二)

不向東山久 東山に向わざること久し

薔薇幾度花 薔薇 幾度か花さく

白雲還自散 白雲 還た自のずから散す

明月落誰家 明月 誰が家にか落つ

山亭夏日

晚唐 高駢

(八二一—八七七)

緑樹陰濃夏日長 緑樹 陰濃かにして夏日長し

楼台倒影入池塘 楼台 影を倒にして池塘に入る

水晶簾動微風起 水晶の簾動いて微風起こり

一架薔薇滿院香 一架の薔薇 滿院香し

書き下し文は、李白は武部利男氏（中国詩人選集、他は都留春雄氏（先述の論文）による。

貫之は、これら詩文中にあらわれる「薔薇」を見ることの渴仰を久しくしていたに違いない。そして、それは萬葉集に詠まれているところの「棘原」「宇万良」であってはならなかった。中国の宮廷で、また貴族の庭園で栽培されたところの「薔薇」でなければならなかったのである。したがって、野生では駄目で、洗練された官能的なつややかさを必要とした。都留春雄氏によると、これら詩文中の「薔薇」は天子や重臣貴族のサロンにおいて題詠を競いあって詠まれたものであり、かつての中国で、人々の美的評価の基準として、つやっぴい植物にもてはやされ、詠物や宮体の対象となつたのであらうと言われている。

その観点から貫之の歌を読んでみると、「あだなる物といふべかりけり」という語句は中国の詩文に現れた「薔薇」と深いつながりをもっていることがわかる。従って、万葉集の「棘原」「宇万良」とは質を異にするのである。恐らくは、遣唐使などを通して日本に流入してきた中国の「薔薇」であつたに違いない。文献上は、十七世紀半ばに出版された水野元勝の「花壇細目」に「長春」という名の記載があり、これは今でいうコウシンバラで、恐らくは、これを庭に植えたのであらう。

このようにして「薔薇」なる語が日本に定着していくには、漢詩の影響は欠くべからざるものであり、貫之が日本で最初の「さうび」の美を発見した者といえる。これは、土佐日記によって、國語の表記を「女手」（ひらがな）まじりにした進取性と相通するものがある。

かくて「薔薇」「さうび」は平安王朝の庭園では栽培品種として育てられていくのである。

二日はかりありて中将まけわさし給へりこと／＼しうはあらてなまめきたるひわりこともかけものなとさま／＼にてけふもれいの人々おほくめしてふみなとつくらせ給はしものとのさうひけしきはかりさきて春秋の花さかりよりもしめやかにおかしきほとなるにうちとけあそひ給

（源氏物語大成卷一、さか木、三七三頁）

きたのひんかしはずしけなるいつみありてなつのかけによれりまへちかきせんさいくれたけた風すしかるへくこたかきもりのやうなる木ともこふかくおもしろくやまさとめきてうの花のかきねことさらにしわたしてむかしおほゆる花たちはななてしさうひくたになとやうの花くさ／＼をうへて春秋の本草そのなかにうちませたり

（源氏物語大成、卷一、をとめ、七〇九頁）

源氏物語には二例「さうび」なる語が用いられており、貴族の庭園の鑑賞植物とされていることがわかる。とくに、「さか木」の文は、「ふみ」（漢詩文）をつくる背景描写として「さうび」が取り上げられており、それも、「春秋の花さかりよりもしめやかにおか

しきよとなるに」と書かれていた。これは「さうひ」自身の美もさることながら、それ以上に、漢詩文の「薔薇」が作者紫式部に印象強くうつっていたのである。そして、さらに貫之の古今集の物名の「我はげさうひにぞみつる花の色…」の歌が脳裡を去来していたに違いない。

## 二、蕪村の茨の句をめぐる

平安朝以来、「さうび」が主座であったが、俳諧になると「茨」がさかんに用いられている。

### 茨の花

かの東草にのほれば

花いばら古郷の路に似たる哉

路たえて香にせまり咲いばらかな

愁ひつつ岡にのほれば花いばら

与謝 蕪村

(日本古典文学大系 蕪村一茶集 一一二八頁)

これらの句を読んでいると、郷愁の詩人、蕪村の姿が浮び上ってくる。それに、江戸時代までに培われてきた日本人のばらに対する審美眼が定着してきているのがわかる。

それは、万葉時代の「棘原」「宇万良」に対するものでなく、平安朝の「さうび」に対するものでもない。野茨ではあるが、そこに美を発見し、心の救いを見出している。

とりわけ「愁ひつつ岡にのほれば花いばら」の句は抒情味豊かである。花いばらは、普通の野茨で、白く、楚々とした姿の戻咲きで

ある。香りもよく、五月中旬頃には万緑の中にあって咲く。「愁ひ」という語が「花いばら」と呼応して暗くならず、さりとして明る過ぎず、共に生かし合っている。

後世の石川啄木の歌に、

愁ひ来て

丘にのほれば

名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実

(啄木 一握の砂)

というのがあがるが、作者は、赤き茨の実を客体化していて、蕪村の句ほどに素材と心象が融合していない。

蕪村の「春風馬堤曲」十八首中に、

堤ヨリ下テ摘芳草 荆與棘塞路

荆棘何妬情 裂裾且傷股

(日本古典文学大系 蕪村一茶集 二六二頁)

とあって、「荆棘」をコミカルに描写している。これは万葉集の「棘原」「宇万良」と同じく、ばらをとげのある邪魔物として扱っている。

小林一茶の句で人口に膾炙している、

古郷やよるもさはるも茨の花

まます子 一茶

(日本古典文学大系 蕪村一茶集 五〇二頁)

「まます一茶」と署名していて、故郷に対する怨みが強く出ている。どちらかといえば「茨の花」が詠者にその怨みを薄めているようにも思える。同じ「茨の花」も詠む人によって千変万化しなければ

ばならない。

その点、松尾芭蕉の「奥の細道」の一文はばらを扱って無難である。

中にも此関は三関の一にして、風驟の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に、次の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。

（日本古典文学大系 芭蕉文集 七六一—七七頁）

しかし、いずれもばらを扱うのが野次であるのが面白い。庶民的な俳諧の世界では、平安朝の栽培花のばらはないのであろうか。京都国立博物館で展覧の屏風絵を見ると、室町期のものに淡紅色の八重のばらが描かれており、野次でない栽培種のばらが存在していたことがわかる。したがって、江戸期においても栽培は続けられていたのであろうが、俳諧の世界では、そういった「あだなる」「そうび」はなじまなかったであろう。

### 三、吉井勇と北原白秋の「薔薇」考

ほのかなる薔薇のほひのなかにゐて

死を思ふより楽しきはなし

吉井 勇

（岩波文庫、吉井勇歌集 六二頁）

ばらを作りたいという気持の湧く時はいろいろある。とりわけ、ばらを作っていてよかった、やはりばら作りは止めたら淋しいだろうなあと強く思うのは、ばらの香りに触れた時である。

一輪の香りもよし、咲いた幾百幾千の花の香りが庭に漂う時もよい。そういった日は、すこぶる快晴、風はあるかないかといった具

合で、ただでさえ気分爽快である。また、ばら展で会場に足を一步踏み入れた瞬間、会場に満ちたばらの香りに新鮮な感動を呼びおこされる。この感動は、年古る毎に新しさを増すように思える。

英国の王室ばら協会設立百年祭に招かれた時、ロンドンの王室園芸会館の広い会場を埋め尽したばら、その豪華な色彩に圧倒されながらもそれ以上の感動を覚えたのは、会場に漂うばらの香りであった。歩むにつれてばらの香りが微妙に変化する。こんなことは狭い日本のばら展の会場などでは想像もできない出逢いだった。

作者・吉井勇は「ほのかなる」とうたっているのに、私の言うほどの強さではない。ばらの香は品種によって一様ではない。本当に甘い感じのするものもあるし、楚々とした感じのものもある。

或る秋、水原秋桜子先生が拙宅にお出になつた。その日は姉の病気の御見舞を頂き、ゆっくりしてもいただけなかったので、夜お泊りの京都ホテルへばらを届けた。拙庭でご覧になって、大好きといわれた真紅のばらを中心に、色々の花色のばらの中に、私の大好きな芳香のばらを幾本か入れておいた。それから何日かたって、「馬酔木」に、

秋薔薇の香のこもれるに明の鐘

秋桜子

（句集「殉教」・水原秋桜子 二百七十頁）  
という句を発表された。

私は、秋薔薇の香と古都の夜明けの融合したこの句が好きだ。ばらの香りは強くても香水のようなきわだったものではない。人の心を幽遠に導く不思議な力をもっている。

作者・吉井勇は、そのばらの香りをいとおしみ、「死を思ふ」静

寂な世界を見出したのだろう。幽邃なその世界の安らぎを、作者は  
楽しさとうたったのだらうと思う。ばらの香りに触れる時、私も作  
者の体験を我が身のものとする事ができるのである。

また、この歌はリルケの墓にしろるされている神銘、一生前、自分  
が選んだ墓碑銘――

薔薇よ、おお純粋な矛盾

幾重ものまぶたの下に

もう誰のでもない眠りを味わっている

よろこび

堀 辰雄 訳

をふまえているようにも思える。これは、次の歌とリルケの詩の相  
関を見ても明らかである。

薔薇の香にはひきたりぬわかうどが  
涙ながしし物語より

吉井 勇

(岩波文庫 吉井勇歌集 十三頁)

黄いろなるこの薔薇を

昨日かの少年はわれに与へき

この同じ薔薇を 今日携へて

わが行くは少年の 新しき墓

見よ 葉に今も ここだけの

しづく懸れり

今日 これは涙のしづく

きのふ そは朝露なりし

片山 敏彦 訳

リルケはばらが好きだった。ローズ・ガーデンを作り、自ら栽培  
の苦しみを知り、よろこびを知った。一九二五年、女友達の訪れに

自らばらを切り、その時、とげにささった傷口から壞血病になり亡  
くなったと語り伝えられている。今もローズ河畔にあるリルケの墓  
にはばらが寂しげに咲いている。

ローズより吹き上ぐる風に薔薇一輪

揺れやまずリルケの墓碑に影する

高安 国世

(昭和五十四年九月一日(土) 毎日新聞 19面)

したがって、吉井勇はリルケを愛読し、リルケの静寂の境地に共  
感を覚えていたのであろう。

近代歌人として、比較的多くばらを歌っている人に北原白秋が  
いる。今、現代日本文学大系二十六巻より白秋の薔薇に関する主な歌  
を抜いてみよう。

南風薔薇ゆすれりあるかなく斑猫飛びて死ぬる夕ぐれ

夜会のおと

かくまでも心のこるはなにならむ紅き薔薇か酒かそなたか

女友どち

ゆくりなく庚申薔薇の花咲きぬ君を忘れて幾年か経し

日光現像

壺にして影ぞおぼめける盛る色の薔薇とを見れば薔薇とし見ゆ

女童は父が人づゑ夢薔薇の白きは見つつ寄りて言ふかも

白秋の詠む薔薇は色彩的に把えているものが多く、彼の歌の官能  
の多彩さがよくあらわれている。それにひきかえ、吉井勇の「薔薇

のにはひ、香り」は静的な心象を詠うのにふさわしく思える。

(昭和五十五年三月二十三日稿)

(京都府紫野高等学校教諭)